

今日の福音書は「カナの婚礼」のお話として、皆さんよく御存じの話です。この箇所は3年に一度しか回ってこないのですが、私にはとても印象深い、いろんな思い出のあるお話です。

そのひとつは、まだ司祭になったばかりの頃、菊池黎明教会でこの奇跡物語の説教したことがあります。

私たちは、「水をぶどう酒に変えることはできない」それは、神様のなさることであって、私たちがしなければならないことは、イエス様が命じられること。「水がめに水をいっぱい入れなさい」という言葉に従って、水を汲むことが大切だ。ぶどう酒がないのに、どうして水を汲むことが大切なのか、私たちに理解できなくても、命じられたことを実行することで、神様の奇跡のお手伝いができるんだから、命じられたことを実行しましょう。

そんな話をしたら、礼拝の後である信徒の人が、「水を汲む力もない私はどうしたらいいのでしょうか。」と言われたのが、今も心に残っています。そこで、今日はそれに応えるような話をしたいと思います。

私は、水がぶどう酒になる奇跡よりも、どうして前から準備していた結婚式のぶどう酒が、なくなってしまったのか、それを疑問に思っていました。

私はこれについては、自分勝手に、面白い想像をしていましたが、ある時、他の人の説教を読んでいて、私と同じ考えをしている人がいたので、ちょっと自信を持ってしまいました。

実は、ぶどう酒が足りなくなった責任は、イエス様にあった、ということです。イエス様が、招かれてもない男たちを大勢引き連れて、結婚式の披露宴に現れた、ということです。

今日の福音書は、ヨハネによる福音書の2章の最初です。

1節2節を読んでみます。『三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。』と書かれています。

これは本当でしょうか？私はヨハネが、あとから辻褄を合わせるために、表現を変えてしまったのではないか、と思うのです。本当は、イエス様も弟子たちも、婚礼に招待されてなんかいなかったのではないか、と思うのです。

「三日目に」という言葉から始まっていますが、1章ではイエス様が次々と弟子を作る話が展開しています。「その翌日」という言い方が何度か出てきます。それから想像すると、一日目には、イエス様がヨハネから洗礼を受けられた翌日ということだと思います。元々洗礼者ヨハネの弟子だった、アンデレとヨハネがイエス様の弟子になり、そしてアンデレは、自分の兄弟シモン・ペトロも仲間に加えます。そして二日目には、アンデレとシモン・ペトロの兄弟と同じ出身地のフィリポがそれに加わり、フィリポは、カナの町の出身のナタナエルにも声をかけて、結局イエス様は二日間で5人の弟子を作ることにしました。

だから、三日目には、イエス様たち6人が婚礼のお祝いに出かけていった、ということでしょう。昨日や一昨日、弟子になったような者が婚礼に招かれる、ということがあるのでしょうか？

結婚式の会場は、ナザレから数キロしか離れていないカナの町ですから、おそらくマリアさんは、親しい友人の家の婚礼に招かれたか、手伝いに行ったのではないか。マリアの息子のイエス様が前から招待客のリストに入っていたとしても、その他の5人は飛び入りの客だったでしょう。

あるいは、カナの出身であるナタナエルは前から招待されていたが、それにイエス様たちが一緒になって押しかけたのかもしれませんが、しかし、そんな飛び入りの客は、主催者側からすれば、迷惑な話だろうと思います。

イエス様が他のたとえ話などで話された「婚宴の招待客」のお話（マタイ22章）のように、お客が居なくて困り、町の大通りで、見かけた人を誰でも連れてくるような非常事態ならいざ知らず、招待客のリストに入っていない人たちが、急にやってきて、お酒を飲むわけですから、十分に用意していたはずが、全く予定外のお客。招かれざる客がやってきて、困ったのではないのでしょうか。

他の聖書の箇所では、イエス様は、ご自分のことについての人々の評判に触れて、「人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。（マタイ11：19）」と発言しておられますので、イエス様たちは大酒飲みの集団だったのではないかと思います。

今日の福音書で、マリアさんは「ぶどう酒がなくなりました」とだけイエス様に言っていますが、大酒飲みの息子たちの集団だと思えば、「あなた、急に大勢の酒飲みを連れてきて、ご主人がこまっているじゃないの。何とかしなさいよ。」とぼやいているのが、真相ではないか、と私は、この話を読むたびに想像してしまうのです。まあ、それは余談ですので、それぐらいにして、本題に入りましょう。

水がめの問題です。

6節には、『そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。』とあります。メトレテスという単位が出てきました。聖書の終わりの方を見ると、1メトレテスは約39リットルであると書かれています。6つある水がめが、2ないし3メトレテスずつ入る、というわけですから、一つが、2.5メトレテスとすると、15メトレテスとは、585リットルということになります。

6つの水がめに入れる水の量は、およそ600リットルです。私は今回初めてまともに水を汲むことを考えてみたんですが、大変なことです。水道のある現在とは違います。

井戸から水をバケツで汲んでくるとしましょう。イスラエルに天秤棒があったかどうか知りませんが、バケツ1杯に5リットルの水が入るとして、それを棒の両側に担いで運べば、1回に10リットル。これを60回続けなければ、6つのかめにいっぱい水を満たすことはできません。聖書には、これを行ったのは、「召し使いたち」ということになっています。ひとりでやったわけではないでしょう。しかし、カナの町にそんなにたくさん井戸があったとも思えませんので、数人の召し使いが、相当時間をかけて、この6つのかめに水を汲んで満たしたのでしょう。

この汲んだ水が、ぶどう酒になったのは、みなさんよくご存知の通りですが、注意して見ていただきたいのは、8節9節の言葉です。

『8:イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。9:世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった』

ぶどう酒に変わった水を、召し使いたちが運んでいって、世話役に渡したら、世話役は驚くだけですが、水を汲んだ召し使いたちは、どのようにして、それができたかわかっているんですね。

この違いに注目しましょう。

世話役は、花婿に『だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわった所に劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。』と言っています。このぶどう酒は、花婿が隠しておいたものだ、と信じているので、ぶどう酒が上等なことだけしかわかっていません。でも、何回も水を汲んで苦労した召し使いたちは、イエス様の素晴らしい奇跡による恵みを味わい知ることができたのです。

ちょっと短絡的かもしれませんが、苦労して水を汲んだ者だけが、素晴らしさを味わえる。その苦労なしに上等なぶどう酒を飲む人には、本当の素晴らしさはわからない、ということだと思ふのです。

それでは、私たちにとって、『水を汲む』とはどういうことでしょうか。ある人は、水を汲む力もない私はどうすればいいのか、ということを問われたのですが。どうでしょう。

今日の使徒書には、私たち一人一人に違った賜物が与えられていることが書かれていました。わたしたちはそれぞれが、違った賜物を生かして、全体の益になるために働くのだ、と書かれています。その全体とは、キリストの体である教会のことです。つまり私たちはそれぞれ、キリストと共に働く者なのです。それぞれの与えられた賜物によって、それぞれのところで働くことが、『水を汲む』ことなのです。

それを行う時、私たちはそこに働く神様の力に触れて、驚くような恵みに満たされます。しかし、その賜物を生かして働かず、上等なぶどう酒だけを味わっていたなら、本当の素晴らしさに出会わないで終わってしまうということを、今日の奇跡物語は私たちに教えているのです。

新しい年に、恵みに満たされて、それぞれの業に励みたいと思います。

(蛇足の話)

ユダヤ人にも大安みたいな縁起のいい日があります。結婚式は火曜日にやっているようです。神様が天地を1週間でつくられたことが聖書のはじめにあります。日曜日から始めて第3の日は火曜日です。神は見て良しとされた、という表現が毎日あるのですが、3日目だけはそれが2回出てくる。ガリラヤのカナで水がぶどう酒になったのは3日目というのは火曜日にこれがあったという風に、とらえることもできるようです。ユダヤの習慣に従って火曜日に結婚式があったということかもしれません。